



文化財愛護シンボルマーク

第4号

平成17年2月1日発行
岩沼市教育委員会
TEL 0223-22-1111
岩沼市桜1-6-20

岩沼市文化財だより

岩沼市の文化財への取り組み

岩沼市は、古代から都和多賀城を結ぶ東街道に位置していました。江戸時代になると岩沼は門前町、城下町としてだけでなく、奥州街道、陸前浜街道が分岐する宿場町として、栄えてきました。歴史ある岩沼市には、貴重な文化財がたくさんあります。生涯学習課では、文化財の保護と活用を図るため、次のような事業を行っています。



下野郷館跡発掘調査

文化財標柱設置事業



①下野郷館跡発掘調査

県道塩釜亘理線道路改良工事に伴い、平成十二年度から十五年度にかけて発掘調査を実施しました。矢野目足輕に関する貴重な遺構・遺物が多数発見されました。出土品は現在、岩沼公民館二階の文化財展示室に保管しております。

②文化財企画展

第一回「昔の農具」

平成十四年三月開催

日本人の主食であるお米。昔の米づくりを農具を通して体感してもらうため企画しました。

第二回「道具が語る庶民の暮らし」

平成十五年三月開催

我々の身の回りには、生活を豊かにする便利で多機能な道具で満ち溢れています。道具の変遷を通して、昔の人達の知恵と工夫を学ぶため開催しました。

第三回「発掘された岩沼の遺跡」

平成十六年三月開催

過去に岩沼市で発掘調査した成果を発表しました。引込横穴墓群、長徳寺前遺跡等からの出土品を展示しました。

第四回は「なつかしい岩沼の写真と道具展」を平成十七年三月に開催予定です。（詳細は八頁にて）

③文化財めぐりと文化財だよりの発行

文化財に対する知識の向上と保護思想の啓発を目的に、文化財めぐりの開催と文化財だよりを発行しております。

④文化財パトロール

市内の史跡・名勝・天然記念物及び埋蔵文化財包蔵地のパトロールを行い、県にその状況を報告しています。

⑤文化財出前講座

市内の文化財について、出土品や関係資料を使って、分かりやすく説明しています。

⑥二木の松樹勢回復業務

二木の松（武隈の松）の樹勢回復業務を毎年実施しております。

⑦文化財標柱設置事業

市内の埋蔵文化財包蔵地に文化財標柱を設置しております。

⑧古文書燻蒸処理

東北歴史博物館にて古文書の燻蒸処理を年一回行っております。

⑨古建築物調査

市内に点在する古い建物を調査・記録しております。

文化財とは、我々の先人達が残してくれた貴重な遺産です。社会の急速な進展と各種の開発や生活の近代化が進み、破壊、滅失の危機にさらされている現状に鑑み、これら文化財を大切に保存し、後世に引き継いでいくことが我々にとって大きな責務となっています。岩沼市教育委員会でも、文化財に対して前述しました各種事業を通して、保護と活用に取り組んでいます。

この「文化財だより」によって、文化財に対して関心を持っていたければ幸いです。

愛宕神社の米づくり 藍づくりの絵馬

岩沼市文化財保護委員 千葉 宗久

岩沼市の文化財として、下野郷の愛宕神社の「米づくり絵馬・藍づくり絵馬」が昭和四十八年三月二十七日に指定された。

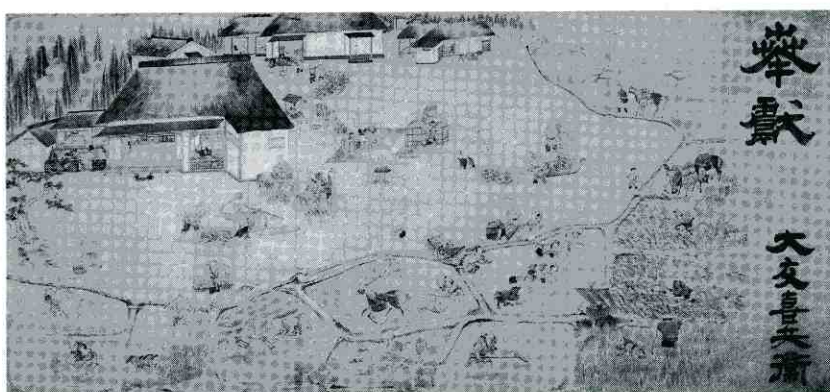
この二点の絵馬は、画家菅井田龍の筆で明治二十年頃の作品と思われる。

田龍は江戸時代の終わり頃、文政三年（一八二〇）に下野郷に高橋平次の次男として生まれ、仙台の画家菅井梅関の養子となった人である。明治三十七年に八十五歳で没した。

「米づくり絵馬」は大友喜兵衛が豊作を祈願して奉納したもので、米づくり作業の風景を描いている。

この絵馬には、江戸時代から明治時代にかけての農作業の様子、田起し・代かき・田植え・草取り・稲刈り・脱穀などのほかに、当時使用した農具も詳しく描かれている。

江戸時代の経済基盤は農業生産であり、仙台藩でも新田開発を盛んに行っていた。また、江戸時代の中頃には農具も改良され、土を深く耕すのに便利な三



▲ 米づくり絵馬

本鍬（備中鍬）や脱穀用の千歯こきなどが用いられた。特に、千歯こきは当時の大発明で、それまで稲をこくのに使われていたこきばしに比べて、鉄製の千歯こきだと六倍も能率が上がるようになったと言われている。この千歯こきは昭和初期まで使われていた農具である。

なお、仙台藩の上田の平均的な収量（玄米）は一石五斗であり、現在上田



▲ 藍づくり絵馬

で反当たり十俵四石の収量とすると、当時は現在の収量の約三分の一強ということになる。

農具が改良されたとはいえ、人力と家畜による大変な作業だったことが想像出来る。

「藍づくり絵馬」は昔藍問屋として知られた安久津庄七が奉納したものである。

この絵馬には、種まき・収穫・乾

燥・藍玉づくり・商い取引などが詳しく描かれている。

藍はかつて着物などの染色原料として用いられ、江戸時代の中頃には仙台藩の財源となる重要な農作物となっていた。当時は紅花などとともに換金作物として盛んに栽培された。

明治時代は藍づくりが最も盛んになった時代で、特に岩沼一帯が県内でも一番の藍の産地であったという。

愛宕神社の「米づくり絵馬」「藍づくり絵馬」は、当時の農作業や風俗を知る上で大変貴重な文化財である。

* 引用参考文献

○ 岩沼市：『岩沼市史』

○ 佐々木喜一郎：『岩沼物語』

○ 千葉宗久：『いわぬま歴史散歩37』

名取郡の大肝入

岩沼市文化財保護委員 森田 恵美子

寛永の大検地と仙台藩の郡村支配機構

仙台藩第二代藩主忠宗は襲封後まもなく領内総検地にとりかかった。寛永十七年（一六四〇）から四年の歳月を費やしたこの検地は寛

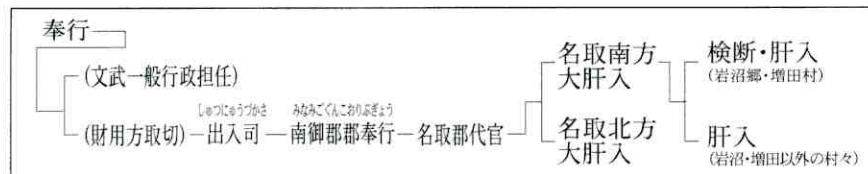
永の大検地と言われる。この検地によって武士的農民であった地侍も完全に農民となり兵

農分離が完成し、また「郡郷の境目」をあきらかにしたことによって、仙台藩の知行制度や貢租制度・郡村支配機構の基盤が確立した。

寛永の大検地の後、現宮城県を中心とし、岩手県・福島県の一部を含む仙台領は二十一部に分けられ、二十一部は南方・北方・中奥奥の四ブロックに分割され、各ブロックに一人ずつ計四人の郡奉行が置かれた。そして各郡奉行の下に原則として一人の代官を置いた。郡村支配機構の役職のうち、ここまでが土分である。

名取郡の代官は一人だが、代官所は長町と増田の二ヶ所があり、これにあわせてほぼ名取川の北の村々を名取北方として長町代官所が、南の村々を名取南方として増田代官所が所轄した。代官の下に二名の大肝入、大肝入の下に村毎に肝入・宿駅には検断を置いた。大肝入以下は百姓身分である。
(表一参照)

〔表1〕岩沼市を中心にみた仙台藩の郡村支配機構



大肝入の職務

大肝入の職務は基本的に郡奉行の郡村支配の一部を担うものであった。藩内共通の事項が多いが、地域による差、例えば農村・山村・参勤交代路の有無などによる違いもあった。

今、名取南方大肝入を中心にその職務を見てみると、肝入以下の村役人を指揮し貢租・諸役を取りまとめ送納すること、郡村の諸経費を割付徴収すること、藩命を下達すること、下達するときは「付札」というものをつけて命令徹底をはかった。逆に管内の宿駅や村からの上申もあった。それらにはこの請願が当を得たものである旨の「末書」をつけた。代官との直談判になるときもあった。

干ばつ時には藩命によりあるいは自発的に雨乞祈禱を主催した。肝入らが作成した村絵図の境目確認や村人数改帳の内容証明をした。宿駅の差配で検断・肝入の手にあまる問題、例えば他郡や藩などとの交渉が必要な案件が生じた場合は大肝入の出番だった。参勤交代などの大名の通過・宿泊の事前通知は大肝入を通して行われた。伝馬不足の時の近隣の村々への助郷要請は大肝入権限でなされた。

伊達氏領内の主要交通路の管理・維持は郡奉行の担当で、現地と郡奉行・代官をつなぐのが大肝入である。たとえば、宝暦十三年(一七六三)二月に藤場の渡し馬渡船と歩渡船の二艘と

もにひどい破損であると訴え、船の作替または石巻の藩船の譲与を申請する上申書が岩沼本郷の肝入から⑦大肝入大友伊左衛門に提出されている。船の破損がひどかったのは事実だったらしく、この翌月馬渡船が沈没、馬七匹は無事であったが、乗客五人が溺死した。

さらに藩の領内専売品や「国産」の米や塩の流通にも関与していた。例えば農民一人あたり年一斗四升の「御割付塩」というものがあつたが、肝入をつうじて配下の村々の必要量を把握し、配布し、集金するのも大肝入の仕事だった。⑨大友伊助が竹駒社にその七日市の起源を問いただしたのは、在方市場の許認可が出入司・郡奉行のルート上の職務だったからである。

大肝入の人事権と司法権

大肝入は自分に直属する村役人の人事権を持っていた。肝入・検断の進退について代官に具申し、馬産との関係で新設された式歳肝入の進退も具申するようになった。

大肝入は百姓(当時は在方商人や漁民なども身分は百姓であった)の行罰にもかかわった。

仙台藩では「仙台藩四十八館」といわれるように領内の各地に上級藩士が配置され、それ以外の多くの藩士も幕末まで地方知行を続けた。それは藩中央の権力を弱体なものにしていた。忠実とその後の藩主は藩士の持つ領主権に制限を加え、藩権力の強化を図った。領民に対す

る私成敗を禁じ、違反すれば処罰した。領民に対する裁判権はすべて藩主にあるとし、その執行は大肝入から開始される場合が多かった。大肝入が罪人の下調べをした自庭は「お白州」と言われたらしい。また大肝入は裁判の結果「奴」に落とされた者を一定期間預かり使役することもあった。

大肝入の出自と格式

藩政初期の大肝入は肝入・検断も含めて帰農した地侍が任命されている例が多い。安永期の、『風土記御用書出』によれば「代数有之御百姓」と言われる家柄の古さを誇る百姓が多く選ばれている。これらの百姓の先祖はほとんどが侍名であり、やはり地侍の流れをひく有力者であろう。大肝入は原則として世襲であったが、多くの郡で別家へ交代しており、また後期には在方町場の分限者の任命が増加してくる。

大肝入は前述したように身分は百姓であるが、士分に準ずる扱いをうけ、任にある間は役料地五貫文が役料五両、そのほか三両以下の補金が与えられる場合もあった。名字・帯刀・鞍馬を許され、麻袴は本人、絹袖は妻子も含めて許され、手代・増手代・締役・罪人捕縛係・小使、合わせて四名・八名の配下を持った。

名取南方の大肝入と小野之兵衛

昭和五十三年(一九七八)、当時の岩沼市文化財保護委員小野力氏が名取南方の大肝入につ

いて調査している(表2)及び表題参照。そして、名取南方大肝入は幕末まで十四名おり、大肝入に任命された家あるいは個人名を明らかにしている。そのうち、⑬小野乙兵衛について以下述べる。

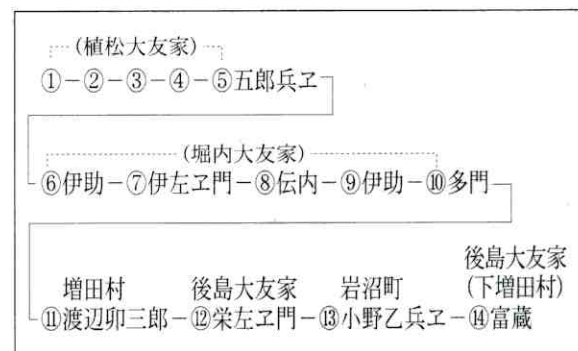
昭和四十九年五月の佐々木喜一郎編岩沼市観光協会刊『岩沼金石志』という小冊子に小野乙兵衛の墓碑銘が収録されている。それによれば、戒名は「智覚徳翁居士」、生年は寛政二年(二七九〇)、没年は安政四年(一八五七)。岩沼に住して五世、製麵業で財をなし、文政七年(一八二四)、三十七歳で検断となり、天保八年(一八三七)大肝入に抜擢されたところ。酒を嗜まず、私財を官に納め民に施したという。天保八年の乙兵衛の大肝入就任は「仙台市史 資料編4」で確認できる。なお、乙兵衛は現在の小野酒造店の先祖にあたる人物である。

さて現在私はまた小野乙兵衛の墓碑を探しかねている。墓碑は最初、光明院(現在の竹駒寺)に建てられたはずだが、小野家では先代が菩提寺を竹駒寺から法常寺に移したという。

また、同じく『岩沼金石志』は乙兵衛の子、物助(続燈軒精屋無忌居士)の墓碑銘も収録しており、そのなかに「大肝入格より進めて郷土格となし」という一節がある。惣助は父乙兵衛の大肝入辞任後、大肝入格だけであつたのか、大肝入として在職した後「格」になったのか、その探

索に成功すれば(表2)は修正される可能性がある。

[表2] 小野力氏「名取南方大肝入大友家について」
(名取市教育委員会刊 文化財調査年表 創刊号)
による歴代名取南方大肝入



卯辰両歳亡霊塔

岩沼市文化財保護委員長 高橋 鼎

岩沼市東部早股の曹洞宗寺院・東国山高林寺の門前に、中央に「卯辰両歳亡霊塔」と彫りこまれた、幅四十七センチ、高さ六十三センチの石碑がある。文化三年(一八〇六)丙寅年十一月十五日、為二十三日忌供養五箇村中、とも刻まれ、更に両側を利用して、右には、北八間上増田東八長谷釜、左には、西八岩沼南八蒲崎阿ら濱とも刻まれて道標も兼ねている。

卯年と辰年二年間に死亡した仏を供養する

塔、という意味に読める。

この塔は、今を去る二二〇年昔、天明三年(一七八三)癸卯歳と四年(一七八四)甲辰歳に発生した大飢饉に遭遇して、尊い命を失った人々の霊を慰めるために、二十三年を経た文化三年(一八〇六)、この地方早股村・寺島村・下野郷村・押分村・二倉村の五箇村の人たちが合同で法要を営んで記念碑を建立したものと見える。記録には、天明三年十月二十三日・封内秋穀不登、五十六万五千石ノ損害ヲ幕府ニ聞入、封内氣候不調米飢饉責ニヨリ諸臣へ今年ノ手伝ヲ免ズ。天明四年十一月十七日・今夏以来封内霖雨、五十五万二千石余水害アルヲ幕府に聞入、とある。(岩沼物語所収)



▲卯辰両歳亡霊塔

仙台藩領では藩政時代に凶作が何度かあったが、人命を脅かす飢饉になって多くの死者が出たのは、宝暦五年(一七五五)・天明三年・天明四年と同七年の凶作が記録され、中でも天明の飢饉は最大のものであった。現在では想像も出ないような悲惨な状態に陥り、その為に命を

落とした人は数知れず、寛保二年(一七四二)の仙台藩の農民人口は約五十六万人であったが、天明六年には約四十二万人に減少して、約三割に近い十五万人が減ったという。(図説宮城県史より)

天明三年の気象は、六月になっても暑気は無く、六月二十日より土用になったが冷えて、七月初めには袷に綿入れを着た位寒かった。日照不足で時々雨が降って寒く、六月二十八日と二十九日には雨の中には灰が混ざっていた。七月一日夜には灰が沢山降ってどうなるかと思っていたが、七月七日に信濃国浅間山が噴火して、昼も夜も砂や石が降り、真つ暗で地震がして人馬が夥しい数死亡した。翌四年には水害も起こり、そのために餓死者が続出し、疫病も発生して大変な状態が出現した。領内で三十万人が死んだという。(高校教材・宮城県史料集より)

稲は実を結ばずに立ち枯れ、野菜類は腐り果て、その上雨は降り続いて水害が起こり、野草類は勿論、生き物すべてを食料として口に入れ、遂には、松の幹の皮や藁の芯も粉にし、餅状にして食べたという。

私達は今、自然の恵みを受けて食べ物には心配ない生活を送っている。こんな飢饉は発生しないと思うが、何時起こるかもしれない天災・日照不足や低温、水害などで、凶作が起こらないことを祈る。

一枚の「振り袖」に託されたもの 「道具が語る庶民のくらし」展より

岩沼市文化財保護委員 伊藤 礼子

一昨年、市民会館で開催された第二回文化財企画展には、約二百五十点の衣、食、住に係わる資料が展示されました。市の文化財展示室に収蔵されている昭和四十年代に収集された道具と、市民の皆様からお貸し頂いた貴重な品により構成されたものです。



▲ 第2回文化財企画展

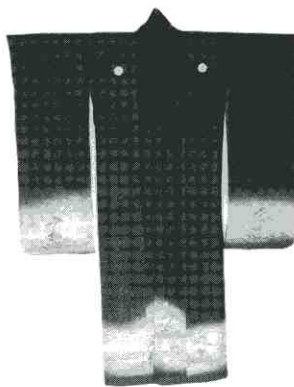
他に例の少ない振り袖

そのなかに、ここに書かせて頂く振り袖があり、次の二点で他の衣装と際立った違いがあります。

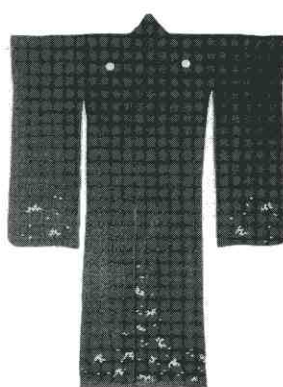
① 生家（長谷家・杏葉牡丹）と婚家（渡辺家・五瓜に三つ星一） 各々五

つ紋の美しい振り袖が二枚、専用の葛に納まっていたこと。

② 振り袖を持参された「ゆき」と言う方の御位牌から、没年がその位牌によって明治三十二年（享年七十五歳）であることから考え、衣装の製作は天保十四年前後と推定されること。



▲ 渡辺家の家紋付



▲ 長谷家の家紋付

* 衣装の調査に当たり、指導を頂いたのは、狩野明子、豊川永俊の各氏です。

次の表から「重ね」と「織り」についての考察（略）もありました。

	婚家(渡辺)	生家(長谷)
家紋	五瓜に三つ星一	杏葉牡丹
丈	158.0cm	158.0cm
ふき	3.5	4.3
袖丈	99.0	96.2
袖巾	32.5	32.0
身巾	58.0	56.5
衿	65.0	64.0
表	錦紗	紋錦紗
裏	紅絹	紅絹
模様	青海波、鶴亀 松竹梅の染め	蝶の刺繍

※ 付属品 薙刀・短剣（木製）・葛

長谷家から嫁いだ経緯

ゆきさんは、館下三丁目現当主・渡辺正巳氏の先祖、三郎兵衛則近氏に嫁いでこられました。以下はその経緯に詳しい吉田育造氏（明治四十三年生まれ）のお話です。



▲ 吉田育造氏

江戸時代後期、ゆきさんの生家は

南小路（現大手町）の商家でした。

吉田家に嫁いでいた叔母の千代さんのお世話により、姉のゆきさんは渡辺家、妹のなみさんは吉田家に決まりました。嫁ぎ先の館下は、内小路と称し、昔は最も格式の高い侍屋敷が並んでいました。

家紋に託した生家の思い

さて、仙台市博物館の樋口智之先生に写真を見て頂きました。

「この振り袖は、どんな時に着用したのか、家紋が生家と嫁ぎ先の両家それぞれに入って二つ揃ってあると言うのは、あまり聞いたことが無い。」と言うお話でした。

渡辺正巳氏夫人すげよさんは、このことについて、私が中学生の頃、曾祖母が「振り袖に実家の家紋を入れて持参するのは、少ないんだよ。」と姉妹で語っていたそうで、誇らしげであったと言います。

武門の家に嫁ぐ娘に、かつての武將長谷氏に連なる一族であることを託された衣装だったのでしょうか。

代々の夫人により保存されてきた美しい衣装への興味は尽きません。

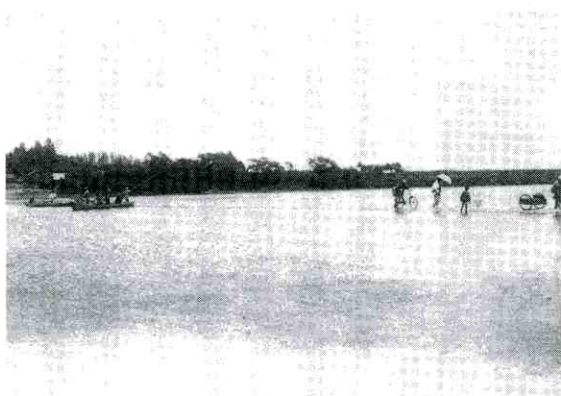
参考図書 日本の紋章 伊藤幸作編

藤場（藤波）の渡し

岩沼市文化財保護委員 阿部 昭平

奥州街道と陸前浜街道の合流した所、亘理と岩沼の境には阿武隈川という東北では北上川、最上川に次ぐ大河が亘理町荒浜、岩沼市蒲崎で太平洋に注いでいます。

Aは昭和七年阿武隈橋が開通するまでここが多くの人達が舟で渡ったという「藤場の渡し」の渡し場です。



▲ A. 阿武隈橋架橋前藤場の渡し全景

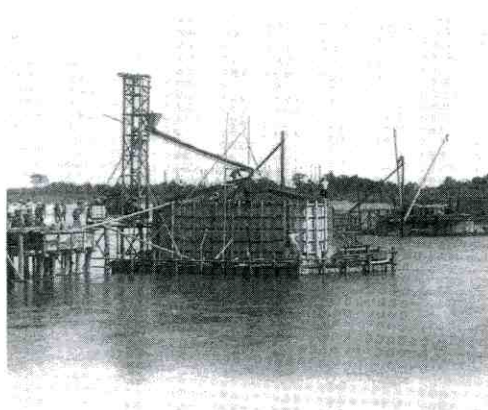
写真は架橋前の風景ですが、亘理側百メートルの所で川面を歩いて渡っているように見えますが、実は石

畳みが敷いてありました。しかし、出水時は途絶した道でした。

舟は馬渡船という大型の舟と一般人などを運ぶ歩渡船が川岸に繋がれていて客が集まれば渡してくれたと言われています。

当時の様子を考えると、人の乗り降りとはもなく、荷物を積んだ大八車や荷馬車の荷の積み替え等、その苦労は並大抵の事ではなかったろうと思われる。

ちなみに、江戸時代「文化年中（一八〇四〜一八一七）」の記録を見ると舟賃の安いところで四文か五文が一般的ですが、天竜川十二文、利根川二十文、藤場で三十二文と岩沼物語に見えます。



▲ B. 阿武隈橋架橋作業中の全景

Bは、架橋作業中の写真ですが、昭和三年隣接町村によって阿武隈川架橋期成会が結成されて度々請願運動が展開されましたが、特に地元岩沼の古内、平間両氏の献身的な政治折衝によって架橋が決したと言われています。

この漢詩には当時の両氏の心情が良く表現されていますので掲載します。

架橋懸案紛争中

不忘山下堵一身

北街盟主策謀密

排除万難大成功

県会議員 古内省三郎

開盛楼上急風雲

県下騒然起論難

通天堵死愛郷志

架橋奏功踊万人

町長 平間 弥五郎

Cは、竣工した写真ですが、昭和

七年七月のことでした。ワールン型で長さ五七一メートル、幅六メートル、工費四十五円と出ています。

しかしながら、この橋も浜街道の交通の役割を果たし続けること約五十年、物量の増加や耐久年限も限界に達し、昭和五十六年には新阿武隈橋の開通にともなって、交通の大役を果たし廃橋となりましたが、これら三枚の写真から時代の変遷と先人の偉業を偲びながら語り継いでいきたいものです。



▲ C. 阿武隈橋竣工の橋全景

岩沼市教育委員会生涯学習課より 鵜ヶ崎城跡発掘調査

鵜ヶ崎城は、JR岩沼駅の西側にある小高い丘陵を中心とした一帯に所在します。言伝えによると、天暦七年（九五三）に多田左馬頭満仲という人物によって築城されたと言われますが、今のところこの時期の遺構・遺物は発見されておりません。戦国時代には伊達氏の『城』として機能していましたが、江戸時代に入った元和元年（一六一五）以降は仙台藩内の『要害』として位置付けられ、以後は岩沼要害、要害岩沼館などと呼ばれるようになりました。ただし、江戸時代の一時期に岩沼が田村氏の所領となった時は『城』としての扱いを受けました。田村氏が一関に移った後は再び『要害』となり、代々古内氏が所領として拝領し、明治に至りました。

江戸時代には、鵜ヶ崎城を中心に幾枚かの古絵図が描かれています。現在の市街地は大きく姿を変えており、これらとの照合は極めて困難な状況となっています。

二〇〇一年から東北福祉大学によって、鵜ヶ崎城跡公園内で発掘調査が始まりました。これまで四次に渡る調査が実施され、多くの成果が得られてい

ます。最頂部にある平場の西側部分では、約十五mに渡る石垣と溝跡が検出されています。この溝跡からは多くの遺物が出土していますが、日常的に使用する食器類の他に、水滴など一般的にはあまり使われない製品も出土していることが注目されます。

この他に近年、教育委員会でも小規模ながら数地点で開発行為に伴った発掘調査を実施しており、建物跡や溝跡などの遺構や、陶磁器・金属製品などの遺物を発見しています。また、現在とは全く違った江戸時代頃の地形なども確認されています。

教育委員会では、今後もこのような発掘調査を継続しながら資料を蓄積して、不明な部分の多い鵜ヶ崎城跡の全容の解明に努めていきたいと思えます。



▲ 染付の水滴

下野郷館跡発掘調査

下野郷館跡は、下野郷字館内・館外地区にある、五間堀川によって形成された自然堤防上に所在する遺跡です。この地にはかつて『矢ノ目足軽』と呼ばれる仙台藩に召抱えられた足軽が居住していたことで知られています。

平成六年に宮城県仙台土木事務所によって県道亘理・塩釜線の改良工事事業計画が立案されました。この計画では県道が遺跡地の西縁辺部を通過することになるため、平成七年に宮城県教育委員会によって遺跡の有無を判断するための確認調査が行なわれました。調査の結果、微高地上では多数の柱穴や井戸跡が検出されました。これらは全て江戸時代頃のものと考えられ、遺跡が広範囲で濃密に展開することが予想されたことから、平成十二年より十五年にかけて岩沼市教育委員会が主体となって発掘調査を実施してきました。

発掘調査では、この地で人々が永く暮らしてきたことを物語る数多くの遺構や、当時の人々が使用した道具である遺物が発見されました。このうち遺構では人々が暮らした建物の柱穴や井戸跡が多く確認されました。また

土地を区画するためや排水のために掘られた溝跡、破損した器などのゴミを捨てるために掘られた土坑の他に、お墓なども発見されています。

出土した遺物は江戸時代の陶磁器類が中心です。これらは主に肥前地方（佐賀県）で作られたもの、福島県相馬地方で作られたものが大部分を占めています。陶磁器類以外では「かわらけ」と呼ばれる土器皿、寛永通寶などの古銭、砥石、下駄などが出土しており、江戸時代にこの地で使用された生活道具の一端が明らかになりました。これら江戸時代の遺物以外に奈良・平安時代や鎌倉・室町時代の遺物も少量ながらも出土しています。このことはこの地では古くから人々が生活してきたことを示す資料であります。中でも岩沼市内では初めての出土事例となる十二世紀頃に中国で作られた磁器片（白磁の碗）が出土したことは、文字史料では確認できませんが、その頃この地に権力を持った人が存在していたことを物語っています。

教育委員会では、今後もこのような発掘調査を続けながら、土に埋もれた岩沼の歴史の発見に努めて参ります。

平成十六年度 文化財めぐり報告

市教育委員会生涯学習課では、文化財に対する知識の向上と保護思想の普及を図るため、市民の方を対象に、「文化財めぐり」を開催しております。

平成十六年度は秋風の爽やかな十月に、三十名の方々と大和町の文化財と国宝大崎八幡宮を見学してきました。

大和町は仙台藩祖伊達政宗公の孫にあたる宗房公が治めていた地で、宮床伊達家として繁栄してきました。

まず七ツ森の風土を背景に、山里の暮らし、文化、宮床伊達家の貴重な遺品等を展示している宮床宝蔵を見学しました。次に大和町の指定文化財にもなっている宮床伊達家住宅を見学。ここは明治維新後、宮床伊達家十代宗廣公が移り住み、以後伊達家の住居として使用されてきた建物で、江戸時代の生活様式をとどめています。次に訪れたのは、原阿佐緒記念館。大和町が生んだ近代歌人で、明治のロマンを残す貴重な洋館に、詩歌が多数展示されており、参加者も熱心に見学しました。

午後は、仙台市青葉区八幡の国宝大

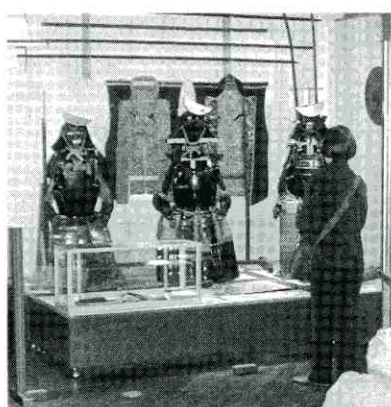
崎八幡宮を見学してきました。長い改修工事が終わり、御鎮座四百年記念事業として開催していた「特別セミナー」に参加してきました。セミナーでは、宮

城県文化財保護審議会副会長である濱田氏から、「八幡宮と伊達文化」というテーマでお話をいただきました。その後、特別公開されていた本殿・石の間・拝殿等を見ました。本殿内陣の神秘的な空間に、感嘆しました。

大変見所満載だった今回の「文化財めぐり」は、参加者から大変好評でした。

近年の急速な開発行為等によって、先人達が残してくれた貴重な文化財が失われつつあります。

今年も文化財保護の一環として「文化財めぐり」を開催する予定ですので、今回参加出来なかった方は、是非参加してみてください。



▲大和町宮床宝蔵

岩沼市教育委員会 生涯学習課からのお知らせ

① 第四回文化財企画展

「なつかしい岩沼の写真と道具展」

内容 明治から昭和初期に岩沼市内で撮影された写真と当時使用された道具等を中心に展示します。

期間 平成十七年三月七日(月)～十三日(日)まで
午前九時～午後四時三十分まで

場所 岩沼市民会館中ホール

入場 無料

※詳細については、市の広報でお知らせいたします。

② 「文化財だより」の原稿募集!

内容 岩沼に伝わる古い風習、伝統、昔話等について原稿を募集します。

**募集
応募
様式** 四〇〇字詰め原稿用紙二～三枚程度

③ 岩沼の古い写真を貸してください

昔の岩沼のまち並みや暮らしが分かる写真はございませんか。例えば、漁業の様子とか農作業の様子等。貴重な文化財資料として活用しますので、お持ちの方は是非ご連絡願います。

ご意見・ご感想をお待ちしております。

岩沼市教育委員会生涯学習課
内線(五七三)